1

宗教体験とその資源化

竹倉　史人

宗教人類学者

皆様、こんにちは。竹倉と申します。昨年もお招きいただきまして、そのときは「輪廻転生」というテーマでお話しさせていただきました。去年こちらに来た時は、初めての雰囲気というか、こういった場所が初めてということもあって、前の方に座っている方たちも怖そうな感じで黙って聴いてるのでけっこう緊張しましたが、講演後の懇親会ではみなさん楽しくて優しい方ばかりで、「こんなことなら、もっと攻めればよかったな」と後で思いました（笑）。今年もまたお話しさせていただけるということで、大変楽しみにしてやってまいりました。

実はその時、とても印象に残ったことがありまして、講演が終わった後だと思いますが、所長さんが、「やっぱり宗教っていうのは、宗教なんだよね」と仰いました。その心はということですけれども、宗教が宗教である限り、どうしたって霊とか魂とか、そういったものと向き合わざるをえない。そういったものを扱わざるをえない。それを抜きにしてしまったら、もうそれは宗教ではないんだというふうに所長さんがおっしゃったんですね。宗教者の方のお言葉ということもありまして、私には非常に刺さってそれが頭の中でずっと響いておりました。

道徳家がいたとしても、道徳家と宗教家っていうのはやはり違いますし、宗教者で学問を修める方もいらっしゃいますけれども、宗教者と学者というのは一緒ではない。後は人生相談とか、お悩み相談とか乗ったりすることも多々あると思いますが、宗教者とカウンセラーはやっぱり違う。ということは、やはり宗教者を宗教者たらしめている何かがあるはずなんですね。その何かというのは一体何だろうということを、私は所長さんのお言葉を聞いてから考えておりました。そういうこともあって、宗教者を宗教者たらしめるのは、ある種の宗教体験、あるいは宗教体験に基づく実践であると私は考えておりまして、今日はこういったタイトルでもう一度宗教について私なりの考えを述べていきたいと思います。

宗教学の世界では、「宗教とは」というのは永遠のテーマともいわれていて、宗教学者の数だけ宗教の定義があるというふうにもいわれております。宗教の多面的な営みのどこを切り取るかということで定義が変わってくると思いますが、私は割とシンプルに考えておりまして、このように定義しております。すなわち「超越者（神、仏、究極原理など）の存在を認め、そこから人間の在り方を規定し、人生を規範化して豊かにする営み」ということです。

日本で言うと、いわゆる「戦後民主主義」と呼ばれる一つの趨勢がありまして、まさに戦後、教育の現場をはじめ、かなり幅を利かせてきた思潮の一つに唯物論と

いう考え方があると思います。これは現在もなお日本に根強くある一つの考え方だといえると思いますが、要は宇宙であるとか、例えば人間であれば我々の体、肉体、こういったものが全て単なる物質で構成されていると考えます。この我々の体も分子の集まりにすぎない。死ねば、その分子がバラバラになっておしまい。つまり「人間、死んだらおしまいよ」と。これは最も非宗教的な考え方と言えると思います。

一方で、超越的な存在、超越者といったものは、我々が知覚できる物質を超えた何かであり、そういったものを我々人間も分有しているという考え方、これが宗教的な考え方だと思います。すなわち死してなお存続するような何か、それを我々は永らく「霊魂」と呼んできたわけですけれども、人間を構成する要素というのは物質のみならず、霊魂といったものも我々は持っている、そしてそれは我々の肉体のみならず、宇宙にもそういった超越者が存在しているということを前提として受け入れて、その立場から物事を考え、実践する。これが宗教者の基本的な姿勢であると思います。

例えば、さっき言ったように死んで肉体がバラバラになれば、分子が拡散してやがてはそれが誰かの肉体になるわけですよね。このような事実をもってして「これが輪廻なんだ」みたいなことを言う人もいますが、私はそれは全くナンセンスだと思います。それは輪廻でも何でもなくて、ただの物質の離合集散であると考えるべきで、そうではなくて霊魂の存在というものが基本の観念としてまずある。そこから超越的なる者と人間というのが、どのような関係を切り結ぶのか。そして我々人間が如何に生きるべきなのか。善とは何か、悪とは何か。そのような形で我々の人生を規範化し、人生をより豊かなものにする営み、これが私の宗教の定義になります。したがって大前提として、「人間は霊的存在である」と。ここからスタートするということになります。

宗教にはいわゆる自然宗教というものがあります。例えば日本の神道なんかがそれに当たりますけども、自然発生的に生まれる宗教ですね。それに対して創唱宗教というものがあります。人間が始める宗教というのがありまして、こちらは、必ず宗教の誕生の瞬間というものがあります。創唱宗教における宗教の誕生というところから段々に時間が経つと、信者が増えて教団ができます。教義のようなものも編纂されていって、さらに組織が大きくなっていくと、国家であるとか、あるいは社会との関わりが出てきて、政治的な問題なんかもいろいろ絡んでくる。お金も当然

そうですね。そこまでいってしまうと宗教というのは非常にややこしいものになってきてしまうわけですが、宗教のエッセンスを考えるには、やはり宗教の誕生の瞬間に注目するのが、私は一番よいと思っております。

ということで、今日は事例として２つほど用意しましたので、宗教が誕生する瞬間というお話をまず見ていきたいと思います。一つめは、イスラム教ですね。皆様ご存じだと思いますが簡単に説明していきたいと思います。

時は610年、今から1400年ほど前、場所は現在のサウジアラビアのメッカ郊外、山の中ですね。そこの洞窟の中で、ムハンマドという40歳くらいの中年の男性がいろんな悩み事があって瞑想していた。そうしたら、ある日突然金縛りに遭います。すると天使のような者が現れて、何かビジョンを見せてくるわけです。そこに何か文字のようなものが書かれてあるんですが、ムハンマドは読み書きができません。天使が「読め」と言うんですけれども、ムハンマドは「いや、読めません」みたいな感じで、押し問答になりました。

変な霊に取りつかれたんじゃないか、ということで家に帰ったムハンマドは不安になって奥さんに相談します。それを聞いた奥さんが知り合いに相談すると「それは天使なんじゃないのか」という話になりました。神様が降りてるんじゃないかというような話になって、次にムハンマドが洞窟に行くときに、奥さんのハディージャも一緒についていくことになります。

そこでまたムハンマドが瞑想して、トランス状態に入るとやはり天使が現れます。試しに文字を読んでみたら、なぜか読めてしまうということで、トランス状態の中でムハンマドは一気呵成に色々喋り始めます。そして奥さんがそれを一所懸命、聞き漏らすまいと一言一句丁寧に記録していった。こういったセッションがずっと続いていった結果、できたのがコーランです。そういうわけでキリスト教であれば新約聖書という聖典がありますけれども、ああいったものとは全然違って、イスラム教の聖典はまさに神の言葉を書き写したものが聖典になっています。

ムハンマド自身も最初は半信半疑だったわけですけども、読めない文字が読めてしまうとか、語っている内容が、どう考えても自分が考えていることではないということで、ムハンマドは、「自分はメッセンジャーなんじゃないか」と思うわけですね。どうやら何か神様のような存在が、私を使って何かを伝えようとしている。どうやら私はメッセンジャーに選ばれちゃったみたいだということで、神の言葉を預かる者ということで、ムハンマドは、自ら預言者というふうに自覚するようにな

ります。

記念すべき最初の信者は、ムハンマドの奥さんです。当時の中東は部族ごとに部族神を祀る多神教の世界なんですね。そういった中でムハンマドが一神教の教えを説き始めます。まさに怪しい「新興宗教」と見なされて、ものすごく弾圧、迫害されます。ここはイエスと似ています。しかし、そういった度重なる迫害にも負けず、最初は身近な親戚から信者が広がっていって、1400年後の現在、なんと全世界のムスリム人口は18億人です。現在、地球人口が約75億人になりますので、実に人類の四人に一人はイスラム教徒であるというのが、今日の状況です。

私が本当に強調したいのはこの話のコントラストなんですね。ほんとに名もなき商人の中年男性が、ほんとに世界の片隅ですよ、中東の山の中の洞窟で、神がかりになって喋る。それを隣で奥さんが一所懸命書くっていう、たった二人で始まった、こんな世界の片隅で起きた出来事が、歳月を経てここまでの規模の話になっているという、このコントラストですね。これは驚くべきことだと思います。現在の人類社会を考える上でも、イスラム教の存在というのは抜きには語れませんし、いわば人類の歴史そのものがイスラム世界の大きな影響のもとにあって動いてきたわけです。それが、世界の片隅でたった二人の夫婦から始まったということです。

次は、もう一つ宗教誕生の瞬間ということで、今度は現代の日本の事例になります。現代といっても1838年ですから幕末ですね。場所は大和国の山辺郡、現在の奈良県になるわけですけれども、天理教の誕生の瞬間をみてみましょう。舞台は大体20戸ぐらいの小さな農村です。そこに庄屋をしている中山家というのがありまして、ここの跡取り息子に秀司という長男がおりました。働き盛りだったのですが、たびたび足に激痛が走るということで、畑仕事などもままならないような状態になってしまいます。これは心配だということで、かかりつけのお医者さんに何度も診てもらうのですが、お医者さんも原因が分からないということで、完全にお手上げの状態になります。

この年の10月23日というのはお祭りの日でしたが、やはり夜になって秀司の足の激痛が発作のように始まりました。医者ではとても手に負えそうもないということで、もう神頼みですね、山伏のところに行って「加持祈祷をしてくれないか」と頼みます。祈祷をやるとなると村人を全部呼んで、屋敷に一同が集まって飲食などのお金も全部中山家持ちでやるので、大変お金がかかるんですけど、そういったスタイルで加持祈祷をやることになりました。夜10時、山伏も急遽呼ばれたもので、

ふだんペアで祈祷を行う巫女さんがこの時は不在で、秀司のお母さん、中山みきが山伏から「ちょっと依り坐（よりしろ）をやってもらえないか」と頼まれて急遽、みきが依り坐役を務めることになります。

いつものように山伏は祈祷を始めまして、順調にみきもトランス状態に入ります。ただ、ちょっといつもと違う神様が降りてきたようだったので、山伏が、「あなたは何神様でありますか」というふうに問います。そうすると、みきが、いつもの声とは全く違う低い声で、「我は元の神・実の神である。この屋敷に因縁あり。このたび、世界一列を助けるために天降った。みきを神の社（やしろ）にもらい受けたい。返答せよ」というふうに喋りだしました。

で、「神の社にもらい受けたい」っていうのは、一体どういうことだろうかということで、みんなで協議するんですけれども、とにかく中山家というのは、村の役人も務めていて、仕事も沢山あって、まだ幼い子供も何人かいたので、とてもじゃないけどみきを差し出すことはできないということで、夫の善兵衛が「神様、ちょっと申し訳ないんだけども、お引き取り願えませんか」と再三拒否します。

ところが、みきはずっとトランス状態に入っていて、その中で、善兵衛と後に天理王命と呼ばれる神様、降りてきた神様との押し問答が、三日間続きます。その間、みきが畳の上をのたうち回ったり、奇声を発したりということで、だんだん衰弱してきて、さらに神様が、「もし不承知とあらば、この家、粉もないようにするぞ」と言うのですね。これはもう断れないということで、10月26日に、周囲の反対を押し切って善兵衛が、「分かりました。みきをお使いください」と神様の要求を承諾します。そうすると、みきは「いや、満足、満足」といって、しばらくたつとトランス状態が解除されて、「あら、私、何してたの？」みたいな感じで素に戻る。息子の原因不明の足の病気もその後に良くなりました。そして同年の10月26日に天理教が誕生するわけです。

この後いろいろありまして実際の布教活動が本格的に展開されるまでには10年、20年と時間がかかってしまうのですが、1869年には「自動書記」というトランス状態に入って無意識状態で文章をしたためる。これが、「おふでさき」という形で残っております。

これもやはり、先ほどのイスラム教と時代も場所も全く違いますが、非常に宗教誕生の構造としてはよく似た、極めてオーソドックスな形だと言うことができますし、私がここでも注目したいのは、やはりコントラストですね。奈良県の小さな農

村で、普通の主婦です。これがいきなり神がかりみたいな状態になった。これもやはり世界の片隅で起きていたわけです。それが徐々に規模を拡大していって、今や日本唯一ですけれども、宗教団体の名前を冠する自治体が誕生するくらいまで巨大組織になっていくわけですね。こういった全てが、たった一人の主婦の神がかりの状態から始まった。これもやはり驚くべきことです。

こういった事例を見ていくと、二人とも共通しているのは、ある種のトランス状態に入って超越者との遭遇をしており、この現象は一体何なのかということがまずあります。

実は神がかりっていうのはそこら中で今も多分、どこかで起きているんです。その現象自体は珍しいことではありません。ただ、天理教やイスラム教のようにそこから教団の規模がものすごく大きくなっていくという事例は、そこまで多くはないということですね。

天理教から直接分派した団体

- **転輪王教会**（1865年、奈良県）
- **天輪王明誠教団**（1888年、横浜市）
- **大道教**（1900年、奈良県）飯田岩治郎が教派神道神道大成教大道教会として独立。
- **井出国子の朝日神社**（1907年ごろ、兵庫県三木市）井出クニの**神がかり**により独立
- **茨木一派**（1911年、奈良県）茨木基敬の**神がかり**により独立、真道会とも
- **ほんみち**（1925年、大阪府高石市）大西愛次郎の**神がかり**により天理研究会として独立
- **太道教**（1940年、東京都杉並区）中村しげの**神がかり**により太道教々檀として独立

ほんみちから分派した団体

- **天理三輪講**（1931年）勝ひさが天理教から独立
- **天理神之口明場所**（1937年）山田梅次郎が天理三輪講から独立
- **世界心道教**（1940年ごろ、愛知県豊川市）会田ヒデの**神がかり**により天理三輪講から独立
- **神一条教**（1942年ごろ、大阪府東大阪市）
- **天理甘露台**（1942年ごろ、奈良県大和郡山市）
- **ほんぶしん**（1962年、岡山市）大西玉によりほんみちから天理みろく会として独立

また天理教もその後いろいろに分派していきます。これは新宗教にはよくあることですが、大体初代の教祖っていうのは、霊能があるわけですね。ところが、世襲だったりして二代目、三代目になると霊能がない、みたいなことがよくあるわけです。そうなった時に、それでもいいという信者さんもいれば、神様と直接コンタクトができなければそれは宗教とは呼べない、というような形で天理教の信者の中からも自ら直接神様とコンタクトを取るということで、どんどん分派して、さらにその分派したところから分派していく、こういった現象もまたよく見られます。

話を戻しまして先ほどのトランス状態、これは一体何なのかということになりま

すが、実は誰もちゃんと説明できないんですね。例えば精神科医であれば、「これは妄想性の人格障害の何とかで」などと説明する人もいますが、これは適当に診断名をつけただけの話で、実際のところこういった現象がどういうメカニズムで起きているのかを十分に客観的に説明するということは、現在もできていないわけで、もうこれは「宗教現象」と呼ぶ他ないわけです。

当然われわれのような現代人のあいだでは自然科学的なものの見方が奨励されていて、そういった学校教育も受けていますので、神様は本当に存在するのかということに疑問を持つわけですね。神様がいるかどうかというようなことはちょっとおいといて、確実に我々が皆、一応納得できること、それは何かというと、まず、ある人間が、今見てきたようなトランス状態に入って、当人の意識を超えた情報を知覚したり、あるいは語りだすといった現象が、人類社会には古今東西で非常に広範に見ることができるということです。そして、こういったトランス状態から得られた情報によって、宗教・教団のようなものが誕生することがあり、その中からさらに歴史に残るような、われわれの社会に甚大な影響を及ぼすような教団もしばしば現れる。これ自体は否定しようのない厳然たる事実としてあるわけです。

トランスということについてもう一つ申し上げますと、よくよく考えてみると、さっきのムハンマドにしても中山みきにしても、突発的に神がかりになったわけではないんですね。というのも、ムハンマドは洞窟で瞑想しておりましたし、中山みきの方も祈祷の最中に依り坐を務めていた。ある種、人為的にそういった状況を準備していたわけです。

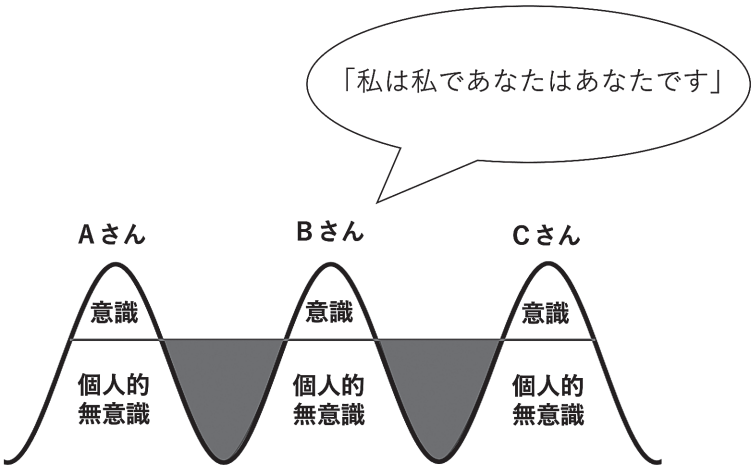
こういう形で人為的にトランス状態を引き起こす技法というのは、辿れる限りでも数千年前から人類が長らく用いてきたものです。例えば、シベリアのシャーマン。シャーマニズムの発祥の地はシベリアといわれておりますが、太鼓をドンドン、ドンドン叩くんですね。あと鉦（かね）とか鈴とかを鳴らして、音を使ってトランス状態に入っていく。あるいはイスラム神秘主義のいわゆるスーフィズムにおける神聖舞踏といわれるものであれば、一時間以上ぐるぐる回り続けて踊り続けます。そうすると、やはり忘我状態といいますか一種のトランス状態に入るという、そういう踊りです。仏教にもいろいろありますね。スライドはタイの寺院になりますけども、これだけの数の僧侶が一堂に会して読経したり、唱和したり、あるいは合唱のような形でメロディアスなものを口にしたりとか、そういう形でトランス状態に入っていく。あとは変わり種でいうと19世紀のフランスで大流行した、今で言う、

いわゆる「こっくりさん」的なものもそうですね。当時のノーベル賞レベルの科学者も巻き込んで、フランスを中心にヨーロッパ社会で大流行したのがセアンス（Séance）という降霊会ですね。みんなで集まって、自動筆記とか、こっくりさんみたいなことをやって霊からのメッセージを受け取るというのが、非常に流行りました。さらにはアマゾンのシャーマン。植物を使ったりもしますね。ちょっと幻覚作用のあるきのことか、葉っぱとか、そういったものを利用してトランス状態に入っていく。これらはいずれも、人為的にそういった状態を引き起こすための技法、テクニックといえるものですね。

トランスからの神がかり状態というのは非常に不思議で、医学や脳科学においても説明ができないわけですが、これを何とか学問的な枠組みの中で理解したいという人が当然でてくるわけです。宗教としてではなくて学問として説明したい、たとえば心理学者のユングなんかがその良い例ですけれども、ユングのモデルをヒントにすると、トランスといった宗教現象をある程度システマティックに理解することができます。

宗教現象のモデル化

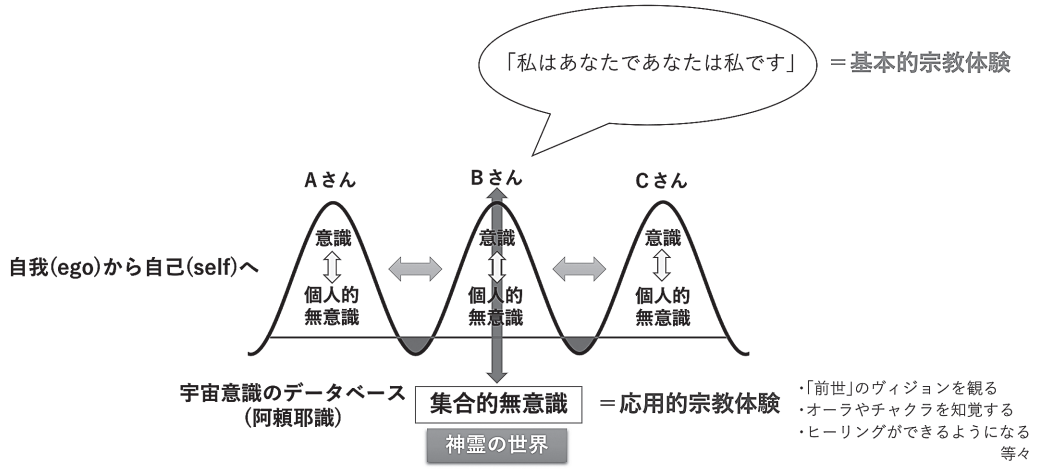
C・G・ユング



まずこれは通常の意識です。陸地と海みたいに見えますけど、陸地の部分が意識に相当する部分ですね。その下には無意識と呼ばれる広大な領域があって、これはユングの師匠であるフロイトが主張したことですけれども、人間の精神というのはこのような意識と、広大な無意識の領域によって構成されているというわけです。

この状態では意識がそれぞれ離れ小島のようになっています。ですから、例えばＢさんから見ると、Ａさん、Ｃさんというのは他人なわけですね。隔絶した他者になります。Ｂさんから見てＡさん、Ｃさんというのは、「私は私で、あなたはあなたです」と意識される状態です。

宗教現象のモデル化



そして先ほど見たトランスの技法を用いるとどういうことが起きるかというと、この水位がどんどん下がっていくわけです。トランス自体は一時的な現象ですが、ここではもう少し長期にわたる繰り返しの経験として考えてみましょう。水位が下がっていくとどうなるか。まず、意識と無意識というものが融合していきます。さっきは水があるがゆえに無意識が見えない状態になっていたわけですけど、たとえば修行をして自由自在にトランス状態を経験できるようになると、意識が無意識を統合しやすくなっていきます。ユングはこういった状況を「小さな自我（ego）から大きな自己（self）への個性化過程」と表現し、人格の成長として説明しています。人間としての器ですね。器が大きくなるといってもいいでしょう。

我々は「よき人であろう」と望むわけですけれども、やはり人間は欲の塊ですから、意識で「いい人になろう」と思ったとしても、無意識は極めて自己本位な欲にまみれているわけですね。みんなとても人には言えないような欲望をたくさん抱えて生きてるわけです。でも、そういうものを自分の一部ではないと否認して抑圧するのではなくて、「これも自分の一部なんだ」と受容することで、意識がそういった自分の暗部、無意識内容も統合していくということが起きるわけです。そうすると、自分の弱さであるとか、「自分も人のこと言えないな」と、寛容の精神ですね、

他者の弱さというものに寛容になれる。自分が今こうやっていられるのもたまたま恵まれていたからで、失敗してしまった人を責めたりすることはできない。自分も、ちょっと状況が変われば同じことをしてしまうのではないかとか、「罪を憎んで人を憎まず」というような、そういうマインドが整ってくると思います。

さらに次、水位がだいぶ下がってくると、ほとんど底が見えてるわけですね。そうすると、さっきはＢさんから見ると、Ａさんとか Ｃさんは断絶した他者でありました。ところが、底が透けて見えてくると、実は自分と他者は地続きなんじゃないかと、こういった感覚が出てきます。つまり水の部分というのは「肉体の感覚」と言ってもいいかもしれません。我々が世界から疎外されてるとか、他者から疎外されているという孤独感を味わう最大の原因は、我々の存在の様式が一個の肉体という単位をもって、バラバラに個人がいる。自分と世界もつながってないわけですよね。こういった肉体の感覚というものがあるから、主体と客体というものが分断したものとして表象されるわけです。

ところがトランス状態に入っていって、こういったつながりが見えてくると、さっきは「私は私、あなたはあなた」という話でしたけれども、今度は「私はあなたでもあり、あなたは私でもある」、こういった境地が体感として出てくる。こうなってくると、いよいよ仏教的になってくるわけですけれども、人間のみならず、生きとし生けるものへの共感能力というものの高まりというものが出てきます。特にトランス状態においては、肉体の感覚は減衰していって、自分は世界とつながっているんだな、という感覚が出てくる。

さらに、この縦の軸ですね。赤で示したベクトルですけれども、意識から、自分の無意識、つまり個人的無意識、さらにそれを掘り下げていくと、その下にあるのは、ユングの言葉で言えば「集合的無意識」という言葉になります。これをちょっとＳＦっぽく言うと、宇宙意識のデータベース。今、我々はインターネットを使っていますから、サイバー空間におけるデータベースというとイメージしやすいと思います。個人の意識も無意識もさらに超えた、みんながつながっているクラウドのデータベースですね。これはもう、まさに仏教。唯識でいうところの阿頼耶識と言っていいと思いますけれども、こういった縦のトンネルが開通していくと、こういった領域にもアクセスすることができるようになっていく。

まさに集合的無意識の世界は、神々の住む世界です。ユング自身も様々な天使のような存在、賢者のような存在と対話したり、いろんな心霊体験を自ら経験してい

ます。このモデルになってくると、神様が実際いるかどうかなんてどうでもよくて、とにかくこういう感じでトランス状態に入っていって、無意識の方にどんどん、どんどんアクセスしていくと、なんかよく分からないけど、心の中で向こう側から語りかけてくる存在と遭遇する。時にはそれは「自分は○○の神である」というふうに名乗ったりする。いろんな神様ですね。いい神様も、悪い神様もいることでしょう。見栄っ張りな神様もいるでしょうし、慎み深い神様も、いろんな神様がいると思いますが、不思議なことに一つのパーソナリティーを持った存在と出会うというような事象が出てくる。アラーしかり、天理王命しかりです。仏典にもたくさん書かれていますが、仏陀も修行中にこのような神霊との遭遇は体験されていたわけです。

さてここまで宗教体験とは何かという話から始まって、そこからトランス状態について検討してきました。トランスの技法についてもいろいろありましたが、こういったテクニックを用いて、修行と言ってもいいんですけど、頭ではなくて、リアルな体験として身体に落とし込む。先ほど言った他者への共感能力ですね。こういったものを体に落とし込むということが、宗教体験の中でも最も基礎的なものといえると思います。ここから、慈悲であるとか寛容であるとか、そういった優れた心性も育まれていくのでしょう。なのでこれはお勉強とか観念のような思弁的な次元ではなく、やっぱり心身の修養を通して体験、体感として実際に経験していく必要があると思います。

さらに、この集合的無意識、神々との出会いとなってくると、また一歩進んだ、応用的な宗教体験といえると思います。先ほど見てきた中山みきであるとか、ムハンマドなんかは、こういった形で、それが何なのかは分からないけど、とりあえず向こうから語りかけてくる存在からコミュニケーションを取って、そこから何か言葉をもらって、そして、私が最初に宗教のところで定義したように、その言葉を、まさに自分たちの人生を豊かにする、あるいは自分たちの人生を規範化する資源として活用するわけですね。こういったところにアクセスできるというふうになってくると、高度な宗教的な技法、いわば「名人芸」のようなものになってくると思います。

そして、こうしたトランス経験を通した意識と無意識の統合が進んでいくと、こういった何かよく分からない存在との遭遇のみならず、こんな事象も出てまいります。例えば、前世が分かるようになる。あるいは、オーラやチャクラが見えるよう

になる。あとは、ヒーリングができるようになる。今、わざと私、現代風に言いましたけれども、こうやって言うと安っぽいオカルトみたいな響きになりますが、これらは2500年以上前から、ヨーガの哲学であるとか、もちろん仏教もそうですが、インド哲学において修行をすることによって得られる能力ということで、永らく語り継がれてきたものです。

実は私も、この20年、私の場合は俗世においてということになりますけれども、この赤い縦のトンネルですね、「どこまで掘れるんだろうか」ということで、自分なりに実験的にやってまいりました。その経験の中で前世のビジョンとか、オーラとかチャクラとか、実際に体験しております。例えば光が見えるようになる、こういうことは実際にあります。これは私自身の体験からも事実であることを確認しています。

私は元々、大学院で輪廻転生、前世の記憶とか、そういったテーマで研究しておりました。そこで最後に宗教体験の一つとして、前世の記憶というものをテーマに事例を見ていきたいと思います。これは、2013年ですから、７年前ですね。お昼の「笑っていいとも」という番組の動画なんですけど、２分ぐらいかな。あるので、ちょっとごらんいただきたいと思います。

（動画再生）

タモリ　これ、いるんじゃないの。
これ、いそう。／これはいるよ。／これは結構いるよ。
前世の記憶がある人。／これ、いる、いる。／来てるんでしょうか。／
ああ、いた。どうぞ。／いた、いた。／どうぞ、真ん中の方に。／
タモリ　すごいね。／どうも、ようこそいらっしゃいました。お名前の方は？
アライ　アライサラと申します。
タモリ　アライさん。前世の記憶が。何で前世の。いつ頃、分かったんですかね。
アライ　５、６年前ぐらいから、はい。
○　何か、きっかけあったんですか。
アライ　最初は、全く見たことがない所の映像が見えて、で、だんだん、だんだんそれが場所が分かってきて、インターネットで調べたりとかして。気になるじゃないですか、見たことない映像なんで。それで場所が分かって。

○　前世は、何だったんですか。
アライ　スペインの女性だったんです。
○　スペインの女性。
アライ　実際行ってきたんです、三年ぐらい前に。その場所に。
○　はい。
アライ　で、行って、そこ、ホテルになってるんですけども、泊まってきて、見た映像と同じだったんで。
○　映像って、寝てるときに見るんですか。
アライ　違います。夢じゃないです。普通に映像が浮かぶんです。
○　へえ。
○　スペイン語もしゃべれるんですか。
アライ　しゃべれないです。
タモリ　前世のスペインの女性は、姿形は見えないんですか。
アライ　見えます。
タモリ　見えるの。
アライ　はい。どんな名前だったかとか、どういう人生送ったかとかいうのは、今は全部思い出します。
○　えー。
○　ちなみに、お名前、何ていうんですか。
アライ　ごめんなさい。ちょっとメモを、今日、持ってきてなくて。
○　何で持ってこないんですか。こんな大事な時に（笑）。
アライ　そうですよね（笑）。
○　ということでね、前世の記憶がある方に来ていただきました。ありがとうございました。

（動画終了）

こういう話、普通、日本のインテリからすれば「夢でも見てるんだろう」とか、「精神病じゃないの」とか言って、一笑に付されて終わると思います。ただこの2013年というのは、私がちょうど東工大の大学院の修士課程に在籍しておりまして、まさに前世の記憶を研究してる最中でした。それで、「これは」と思って、こ

の番組を見た後、すぐ調べて、アライさんの所在を突き止めて会いに行きました。そこでインタビューをしたんですね。テレビでは前世はスペインの女性とおっしゃってましたけど、詳しくはスペインの修道女の人生で結構悲しい話でした。その人生の話を私に話してくれたんですけども、当時私は、こんな感じで前世の記憶を持ってるという人を見つけては、フィールドワークということでインタビューに行くという調査をしておりました。

先ほどの番組では言ってませんでしたが、彼女も瞑想行をしていたということなんですね。それでだんだん、ビジョンが見えてくるようになった。我々は何となく前世という言葉を使ってしまいますが、前世かどうかというのはとりあえず置いておいて、そういった瞑想行を積んでいくと、脳内にある映像、ビジョンが浮かぶという事象がみられます。これは確実です。私も体験してますし、確実に起きます。ただしそれが「前世」と呼ぶべきものなのかどうかは、また別問題です。ただ、大抵の人は、「これはきっと前世なんじゃないか」と解釈するわけです。したがってそこは区別する必要がありますが、私がインタビューをした十数名はそういったビジョン体験をしており、みんなではないですが瞑想のようなトレーニングを積んでいる方というのもけっこういました。

ここでぜひ参照したいものがありまして、これは、私が2015年に出した『輪廻転生』（講談社現代新書）からの抜粋になります。いわゆる原始仏典ですね。パーリ語で書かれた原始仏典、長部経典の『沙門果経』という経典があります。この中で、国王の阿闍世と仏陀が対話するシーンがあります。それを私が、自分の著書の中で抜粋しました。阿闍世が仏陀に聞くんですね。「修行生活を送ると一体どんな善いことがあるんですか」と。そうすると、仏陀が「心が安定し、清浄で聡明となり、汚れなく、煩悩から離れ、しなやかで従順となり、揺るぐことなく不動のものになると、彼は意識を前世の記憶の方に向けるのです。そして彼はさまざまな前世を思い出します」と、このように言うのですね。さらに仏陀がその後に「あそこでの私の名前は何某で、かくのごとき部族に属しており、このような容貌をしていた。あれが私の食べていた物で、私はかくのごとき悲喜の体験をし、そして、これが私の人生の目的であった。そのような人生が終わると、今度はあそこに生まれ変わった。そこでの私の名前は何某であり、私はかくのごとき部族に属することになり、容貌はこのようなものであった。そこではそれが私の食べ物となり、かくのごとき悲喜の体験をし、そしてあれが私の人生の目的であった。そしてそのような人生が

終わると、今度は私はここに生まれ変わってきた、というように、さまざまな前世の記憶を具体的に詳細に至るまで想起することができるのだ」と語ります。これはパーリ語ですから、古い、より仏陀に近い経典になるわけですけれども、こういった能力のことを、仏教では「宿命通」と永らく呼んで、悟りを得るための重要な知的技法の一つと考えられてきたわけです。

で、近現代の日本の仏教学者であるとか、哲学者であると、「どうせ後で弟子たちが、勝手に作った話だろう」とか、「お釈迦様が、そんな馬鹿げたこと言うわけない」とか、そんなことをいうわけですけれども、どうも仏教を哲学のようなものとしてのみ扱おうとする人たちがたくさんいるわけですね。私は、そういった原始仏典とかを見てると、仏陀がありありとこのようなことを言っているにもかかわらず、「いや、仏陀はそんなこと言ってない」みたいなことを言ってる人が余りに多いので、何としても『輪廻転生』という本を書いて、原始仏典のこうした記述をもっと世に知らしめなければいけないという使命感を持ってこの本を書きました。とはいえ、まだまだこういった事象を馬鹿にして軽視する風潮がある。あるいは、逆にすごく特別なこととして、アンタッチャブルなもののような、伝説のようなものとして捉える。

あるいは仏陀とほぼ同時代、ちょっと前ですけれども、ギリシャにピタゴラスという哲学者、数学者がいます。ピタゴラスも、やはり仏陀のように教団を作って、そこで修行生活を送って、弟子たちには、「まず自分の前世を思い出せるようにしなさい」ということを奨励するんですね。これはどういうことかというと、いろいろはかどるわけです、修行が。何で自分が今ここに存在してるのか、何で自分はこういうことにこだわってしまうのかというのが、瞑想中に浮かんだ映像、そういうビジョンを材料にして物語が作れるわけですよね。そうすると、別にそれが前世だろうが、何でもいいのですけども、自分がみたリアルな映像が物語化されて、そして「前世の記憶」として一つのストーリーになるわけです。こうなると、修行がはかどるということです。

最終的には、そういったビジョンも、究極的にはそれも幻であるということで、超えていかなければいけないわけですが、とりあえず修行のプロセスでそういった体験をして、ビジョンを持つということが自分自身を知る、自己の修養にとって極めて重要であるということです。このようにピタゴラスも考えていたし、間違いなく仏陀やその弟子たちもこのように考えていたからこそ、『沙門果経』にあるよう

な記述になるわけです。それは他の経典にもほとんど同じエピソードが出てくることからもうかがえます。

さらに、先ほど「笑っていいとも」に出てきた女性も、瞑想して「前世」と呼べるようなビジョンを見たわけですが、それとここで仏陀が言っている話というのは、基本的には同じものだと見なしております。最初はお釈迦様と同じなんて言っていいのかなと思ったのですが、事象としては同質のものであると考えております。アライさんにインタビューしてわかったことは、人生の悩みを抱えていたアライさんは、スペインの修道女の人生という「前世」のビジョンを獲得して、そこから自分自身についての洞察を得ることで問題が良い方向に進んだり、いろんなことが腑に落ちてQOLが上がったということです。瞑想で得たビジョンを前世の記憶と解釈し、活用することによって、より豊かな人生を彼女は手に入れることができたということです。

瞑想や前世の記憶、かつてこうした知識は奥義中の奥義、秘教中の秘教ということで、出家した、極めて限られた人のみが触れることができたのだと思いますが、現代はそういったものがオープンになって、本屋さんに行けばいろんな本が売っているし、インターネットもある。普通の市民たちが、出家とか特殊な修行ではないけれども、何らかのトレーニングをすることによってビジョンを獲得して、それを前世というふうに解釈しているという事象が広く観察されるということが、私がフィールドワークをして分かった事実です。

宗教学者の島薗進先生は、特定の信仰を持たない一般市民が、こういった宗教的ともいえる修養に取り組んでいるという現象に注目し、それを「スピリチュアリティ」という言葉で表現しております。1970年代以降、先進国で同時多発的に発生している現象で、必ずしも特定の宗教に深くコミットするとか教団に参加するということはないのだけれども、一方で神々とか霊魂といったものを否定しないで、瞑想であるとか、ヨーガであるとか、セラピー、そういったものを実践していき、社会あるいは自分自身の霊性、スピリチュアリティを高めていこうと、こういう意識を持った人たちが世界的に出てきているということを島薗先生が指摘されました。

まさにこれは、「個人主義型の宗教」というふうに呼べると思います。私の今日の講演のタイトルでもありますが、出家などしていない一般市民が、自分なりのやり方でそういった宗教体験をして、そこで得た気づきや感覚、あるいは先ほどのようなビジョン、そういったものを私の表現で言うと、「資源化」と言えますが、自

分の人生を豊かにするための材料として、そういった宗教体験を活用して生きている。昨今では「なんか宗教っぽいね」っていう言葉が「なんか気持ち悪いね」ということを意味するようになってしまったくらい、宗教というのはネガティブなイメージを帯びてしまった、地に落ちてしまったわけです、宗教という言葉のイメージが。とはいえそういう中にあって、皆が「宗教なんてくだらない」、「神とか霊なんてくだらない」と言ってるかというと全くそうではなくて、自分の霊性を高めたいという欲求は、われわれの中に止み難いものとしてあって、恐らく人類が存在する限りなくならない、われわれの持っている本質的な欲求であろうということだと思います。

ただ、そういった個人主義的な宗教のようなものが台頭してくるということは、教団のような形の宗教であるとか、あるいは伝統宗教のようなものが、相対的に勢力が衰退しつつあるということも、同時に意味しているわけです。ところが面白いのは、島薗先生が指摘されているスピリチュアリティ文化というのは、先ほどユングや輪廻転生などの話もしましたけれども、非常に仏教的な要素を持っているということです。そういう意味では、日本というのはお寺がいっぱいあって、仏教的なリソースが豊富にあり、未来の宗教に対して大きな可能性を秘めているわけです。そうすると、仏教教団といったものが、今後どうなっていくのか。それは私も分かりませんし、どうしたらいいのかっていうことも私が申し上げるようなことではないと思いますけれども、少なくとも皆様のような「プロフェッショナルな宗教家」の存在、仏教に通じてる人たちの存在というのは、やはりこれからの宗教の発展を考えるうえでも極めて重要であると私は考えているわけです。

ということで、本日は宗教体験について、あるいはそれを現代では個人がどのように資源化しているのか、といったことについてお話をさせていただきました。ご静聴ありがとうございました。